大障教ニュース

大阪府立障害児学校教職員組合
大阪市天王寺区東高津町7-11
府教育会館704号
TEL 06-6765-8904
FAX 06-6765-8905

“子どもたちの笑顔あふれる学校”を！

「府立支援学校の新校整備を求める請願」署名のとりくみを大きくひろげよう

9月24日、父母・教職員・関係者らの長年の要求と運動を受けて、文部科学省は「特別支援学校設置基準（以下、設置基準）」を制定・公布しました。設置基準は、「在籍者数の増加により慢性的な教室不足が続いている特別支援学校の教育環境を改善する観点」から制定されたと通知にはあります。学校設置者である大阪府には、こうした国の動きをうけて、支援学校の増設による教育条件の抜本的な改善が求められます。4年目となる「『今後の児童生徒数の増加』に見合った府立支援学校の新校整備を求める請願」署名のとりくみを大きくひろげ、大阪府に学校増設を迫りましょう。

「過大・過密」をさらに深刻化させる府教委「基本方針」

2020年10月、府教委は、「有識者会議」の論議を踏まえて、2018年3月に策定した前方針を見直し、「知的障がいのある児童生徒等の教育環境に関する基本方針（以下、基本方針）」を発表しました。見直しの中で、「将来推計」を再推計し、これまでの推計値を約200人上回る1590人増となることが明らかとなりました。

府教委はこの対応として、「閉校した高校を活用した新校の整備」「知的障がい支援学校の既存施設の活用」「府立高校への分教室の設置」などを方針として示しました。

しかし、府教委が発表した新校整備の具体化は、旧西淀川高校校舎を活用した知的障がい校の開校のみで、府立支援学校の「過大・過密」の解消とは程遠いものです。

有識者会議では、府立支援学校の現状を踏まえて「学校整備は待ったなし」「本来の教育のあるべき方向と逆行している」「トイレや更衣室の不足など人権問題になりかねない」などの意見があり、府教委はこうした意見を真摯に受け止めなければなりません。

「今後の児童生徒数の増加」に見合った支援学校の増設を

2020年4月、府内3地域の通学区域割の変更が強行されました。しかし、今年度も高等支援学校を除いて20校ある府立知的障害支援学校のうち13校で、在籍児童生徒数が300人を超えています（内2校は400人超）。通学区域割の変更は教育環境の改善に役立たないばかりか、子どもと保護者の負担を増やすだけです。

多くの学校では開校当初の想定規模を大きく超え、教室転用や間仕切り教室、60分を超える長時間通学など、子どもたちの教育条件は極めて劣悪な実態にあります。

こうした状況のもとで、昨年からの新型コロナの流行も重なり、「過大・過密」を解消と適正規模の学校増設の要求はさらに強まっています。

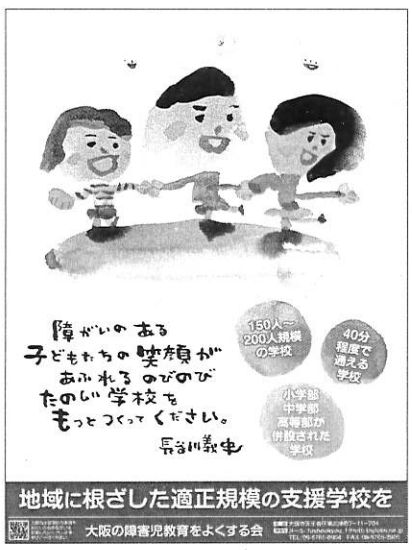
全教職員への幅ひろい協力を呼びかけます

大障教は、「子どもたちの笑顔あふれる学校」を求めて、幅ひろい障害児者関係団体とともに、3年間続けて学校増設署名運動にとりくんできました。大障教各分会やよりよい教育を願う民主団体や労働組合との協力・共同をひろげて、これまでに9万4454筆の請願署名を府議会に届けてきました。

今年度作成したカラーリーフレットには、父母や教職員のねがいや怒りの声が寄せられています。また、絵本作家の長谷川義史さんが私たちの運動の趣旨に賛同して素敵なイラストメッセージを寄せていただきました。

多くの方々に支援学校の実態を伝えるとともに、今後の児童生徒数増加に見合った学校建設を実現するために、5万筆を目標に署名の呼びかけをひろげていきましょう。

署名用紙・リーフレット・ポスターなど、必要な資材は書記局へご連絡ください。2月府議会提出（署名は1月末最終集約）にむけて、大障教組合員はもとより、全教職員・ご家族やご友人など幅ひろい署名へのご協力を心より呼びかけます。



ポスターも完成。絵本作家の長谷川義史さんが応援のイラストを寄せてくださいました。

書記局のひとりごと

厚生労働省の2022年度概算要求は、過去最大の33兆9450億円（一般会計総額）。増額分は高齢化や医療の高度化に伴う社会保障費の自然増などによるもので、コロナ禍に対する医療・介護などへの支援は圧倒的に不十分なままです。

コロナ患者を受け入れる病床確保支援や介護施設の感染拡大防止対策への補助など提供体制の確保に56億円、検査体制の確保や保健所の機能強化に29億円を要求。一部は金額を示さず年末に向けて調整となっていますが、医療機関・介護事業者に対する受診・医療利用控えの減収補填には踏み込んでいません。明らかに全国規模の要求額としては桁を一つ二つ上げても少なすぎます。

一方で、病床削減はコロナ下でも進めます。通常国会で法定化した、消費税財源を医療機関の統廃合・病床削減に充てる「病床機能再編成支援事業」など地域医療構想の推進に857億円を計上しています。自公政権が「社会保障のため」といって憚らない消費税財源を原資に、医療逼迫を招き批判を浴びている施策を反省もなく推し進める内容です。

第5波の感染爆発は深刻な医療逼迫を招き、「自宅療養者」は全国で15万人（8月25日）にも達し、容態が急変し自宅で亡くなる事態が急増しました。政府がコロナ入院患者を重症者らに「制限」するとした無責任極まる方針は、いまだ撤回もされず、「自宅療養者」はいまなお10万人という事態が続いています。

憲法の規定にもとづく野党の臨時国会召集要求をことごとく拒否し、政権のコロナ対策の無為無策への反省もないまま国民の命を守る責任を投げ捨て、顔だけすげ替えて国民の苦しみに向き合おうとしない自公政権による政治は、もううんざりです。

今年もベテランの熱い語りに みんながパワーをもらいました！

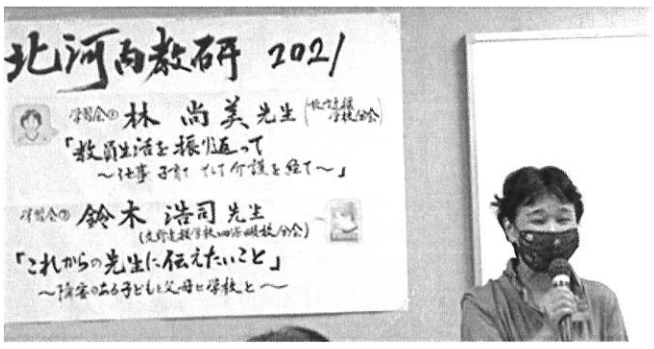
第8回北河内ブロック教研

7月31日、北河内ブロック（交野支援分会、光陽支援分会、四條畷校分会、思斉支援分会、寝屋川支援分会、枚方支援分会、守口支援分会）で合同教研を行いました。

今年は感染予防のために日程を大幅に短縮し半日実施としました。緊急事態宣言が出る直前に2年ぶりに何とか実施することができました。8回目の今年は、かつて寝屋川支援学校で部主事をされていた林尚美先生（枚方支援分会）と、鈴木浩司先生（四條畷校分会）のお話とあって、「ぜひ聞きたい」と北河内ブロック以外へ転勤された先生方の参加もあり、未組合員の方を含め35人が参加しました。

教員の笑顔と元気と余裕が子どもたちに大切な環境

林尚美先生は、子育て、介護をしながらどのようにして定年まで仕事を続けられたかを話されました。生活面で大変な経験をされながらも、「大変なのは自分だけではない。自分も周りの人に支えられている」と、困っている人に声をかけ、多くの先生に権利のパンフを渡したそうです。寝屋川支援学校では、林先生に声をかけられ、たくさんの先生が組合に加入しました。林先生は、ゆとりのある現場で教員が笑顔で元気であることが、子どもにとって大切な環境だと話されました。ご自身もいつも笑顔で生徒と接し、同僚からたくさん相談を受け、民主的な学校づくりに奮闘されました。林先生と関わりのあった参加者は、「相談して頼りになる、強くて優しい方」「上の人という感じではなく、一緒の立場で話せる先生。いろんな経験があって、的確なアドバイスができるんだと思った。支え合う大事さ、同僚性の大切さを感じた。」「保護者も生活と仕事、障害のある子の子育てなどある。お母さんのしんどさも理解して支援をしなければならない」と感想を述べました。

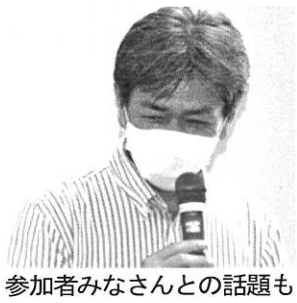


子育て、介護、仕事を振り返り優しい口調で語る林先生

いつも子どもをまん中にして

鈴木浩司先生は、教員になりたいと思ったきっかけなどから振り返り、19年間府障教・大障教執行委員を続けられ現在に至るまでの教員人生、次の世代を担う青年教員に大切にしてほしいことを語りました。組合員の多い民主的なあこがれの学校、寝屋川養護学校に希望して転勤し、府障教・大障教の執行委員として父母と共同して学校建設運動に関わったこと、部主事として、保護者の思いを受け止めながら子どもを中心に実践をすすめてきたという熱いお話は、時間が足りないくらいでした。参加者からは、「枚方支援がどうやってできたのか、その経緯の一端を聞いて、運動された結果、現在自分が枚方支援に勤めていることがわかり、感慨深い」「教師生活の中で保護者の思いを感じて受け止める力を自分に育てたい」「おかしいと思ったことを発言する、声をあげることはそう簡単なことでないが、働いている教職員、子どものためにそうしてくれる姿がかっこいい」「子どもの様子の記録を取ることなど、近くで学べてよかった」などの感想が述べられました。また、感想だけでなく、参加者自身の日ごろの実践や考えに基づいて、学びを深める発言がたくさんありました。

みんなで集まって学び合う教研の大切さ、ベテランから引き継いでみんなで語り合う大切さを今年も感じました。



参加者みなさんとの話題も交え、楽しく語る鈴木先生

光陽支援学校分会　佐々木起美子

参加者の感想より

○仕事も介護も育児も全力で向きあってこられた林先生のお話を聞くことができてよかったです。

○仕事の裏にはそれぞれの人生があるなぁと感じました。

○子育て介護をすべて終え、夫婦二人の今から思うと「よく頑張ったなぁ」と自分をほめたくなります。今、真っただ中にいる人たちには、この状態がずっと続くわけではないので、頑張って欲しい（周囲の人たちに甘えて）と思います。

○「謙虚に、誠実に、愚直に」「迷ったら子どもの立場に立って」など、鈴木先生の教員としての信念を感じるお話だった　なぁと思います。

○管理職や教育委員会に対して、身を挺して具体的に行動を起こしてこられたこと、職場の同僚に対してもいつも温かく、子どもや保護者に対してもやさしく包み込むように接しておられたことが、教育の根本的な考え方や教育への思いに裏打ちされたものであることを、今日のお話をお聞きして改めて認識させていただきました。

○願い続けること、動き続けること、大切だと感じます。自分のできることで、これからの子どものためにやっていけたらなと思います。

○今回の話はとても内容が濃く、一言「すごいな」と感じました。自分が定年するときに90分にはおさまらない話を語ることができるような教師生活をおくりたいと思いました。

○お二人の先生のお話はもちろん、参加されていた先生方の言葉にハッとさせられたり、共感したり、とても気付かされることが多く貴重な経験をさせてもらいました。